

## 農村社会での多様なニーズとそれをくみ取る仕組みづくり

## Various Needs in Rural Area Planning and Proposal of Measures Clarifying Them

原田 茂 樹\*  
(HARADA Shigeki)木村 薫 子\*\*  
(KIMURA Kaoruko)

## I. はじめに

農村社会において、多様な主体が住み続けられることが必須となっている。それは、少子高齢化が進行している昨今、多様な主体が魅力を感じる農村社会構築が必須だとも言い換えられる。ここで、「主体が多様である」ことは「住みたくなる条件も多様である」ことをまず認識する必要がある。多様な主体とは「さまざまなニーズ（とそれを生む価値観）をもった主体」と同義だからである。そのため、農村社会の構築において、「多様なニーズをくみ取る仕組みづくり」の検討が必要だと筆者らは考えている。最終的には、「くみ取ったニーズを農村社会づくりに反映するために合意形成する」プロセスが必要になる。多様なニーズは、得てして個々のニーズの重要度や、他のニーズとの関係（トレードオフ関係など）において、主体間での大きな違いを生むからである。この点については、地域環境を分解した「環境指標」を用いた議論<sup>1)</sup>が有効である。農村という総合的な姿から個別指標（たとえば、「自然の状態」をさらに細かく分解した「森林状態」、「水系の状態」など）を作成し、個別指標ごとにそのあり方を議論するとともに、各指標の重要性（ウエイト）を併せて議論し集約することは合意形成の有効な手段と考えられる。そのために行うべき作業は、適切な指標セットづくりを行うことであり、その指標セットは、「客観的に町や農村の状態を表す」だけでなく、「主観的な価値観をとりいれた」ものである必要がある<sup>2)</sup>。現代社会では、前者を代表する「利便性」のように客観的・定量的に表される状態についてのニーズのみならず、快適さ、人とのつながり、豊かさ、満足感など客観的に表しにくい状態・感覚に対するニーズが高くなっている。多様な主体が住み続けられる農村のあり方を議論・合意形成する指標セットであるから、主観的な価値観の違いに起因する多様なニーズをくみ取れる指標セットづくりが基軸となるといえる。

本報では、農村地域におけるニーズの多様さを現実

の調査結果（宮城県丸森町による総合的調査<sup>3)</sup>）から示し、その後、「町のキャッチフレーズを用いた指標セットづくり」の試行結果<sup>2)</sup>について示す。さまざまな集団を対象とした調査を行っており、その一部についての因子分析<sup>2)</sup>の結果を紹介する。その後、作成したキャッチフレーズ指標案を補うため、他の現実の調査（宮城大学地域連携センターによる調査<sup>4)</sup>、筆者らによる調査<sup>5)</sup>）結果について考察することも目的の1つとする。なかでも新産業創成、観光化、農産物のブランディングなどにつながる現実の取組みとして、丸森町大内地区における冬期湛水水田の構築<sup>6),7)</sup>を紹介し、多様な主体が住み続けられる農村にむかう現実の事例とする。最後に丸森町の現地協力者を通じ、上述した調査が行われたあとの丸森町でのニーズ、特に2019年の台風19、20号以後の自然環境に対する意識の変化を聞き取った結果を取り入れ、今後の指標セットのあり方について考察する。

## II. 宮城県丸森町にみる多様なニーズ

中山間地であり少子高齢化が進行している宮城県丸森町では、町役場が総合的調査<sup>3)</sup>を行っている。この調査は、第五次丸森町総合計画策定に係る基礎調査として2013年に行われており、中高校生（配布者数602人、回収率83.4%）、一般町民（配布者数1,500人、回収率42.2%）、町職員（配布者数183人、回収率94.0%）の3つのグループに属する被験者に対し、ほぼ同じ設問・選択肢により、丸森町に望むことや、丸森町の個性を調査している。ここでは、設問の中の「丸森町のまちづくりについての満足度と重要度の集計について」の結果<sup>3)</sup>を引用し解析する。この集計は、3つのグループに対し、表-1に示すように、「社会生活環境に関すること」、「保健・福祉・医療に関すること」、「教育・文化に関すること」、「産業振興に関すること」、「行財政に関すること」、「地域づくりに関すること」、の6カテゴリー、41の個別指標に対する重要度と満足度を5件法（満足度や重要度を5段階で評価

\*福島大学食農学類生産環境学コース

\*\* (株)日立製作所



主体の多様性、ニーズ、キャッチフレーズ、指標、因子分析、冬期湛水水田、自然環境

表-1 丸森町における住民3グループにおいて重要度・満足度の評価が独自の個別指標（文献3）を改編）

カテゴリー	個別指標	中高生		一般町民		職員	
		満	重	満	重	満	重
社会生活環境に関すること	公共交通（鉄道・バス）の利便性						
	幹線道路（国・県道）の整備	III	III				
	生活道路（身近な道路）の整備	III	III				
	上水道など飲料水の確保						
	下水道の整備と汚水や雨水の処理			I	I		
	公園や広場の整備						
	自然や木々の豊富さ						
	町並みや景観					III	III
	交通安全や防犯対策						
	消防や防災対策						
保健・福祉・医療に関すること	インターネットなどの利便性	IV	IV	III	III	II	II
	高齢者、障害者、母子・父子家庭、介護などの福祉サービス	II	II				
	子育てのための児童の保育環境（延長保育等）			II	II		
	幼稚園や保育所（児童館）など施設の充実						
	病院や診療所など医療施設の充実						
	休日や夜間診療対策						
教育・文化に関すること	健康診断や健康・体力づくり対策	III	III				
	小学校や中学校の施設の整備・充実						
	図書館や文化施設の整備・充実						
	スポーツ施設の整備・充実	IV	IV				
	スポーツ教室や各種協議会の内容等					II	II
産業振興に関すること	地域の歴史や文化、伝統継承への取り組み						
	農林業の振興（基盤整備や経営指導など）						
	企業誘致による雇用の場の確保	II	II				
	地元中小企業の振興	II	II				
	地域資源を活かした新たな地元産業の育成	II	II				
	地元商店街や小売店の振興	IV	IV				
	日常の買い物の利便性					III	III
行財政に関すること	観光の振興（施設整備、宣伝充実など）	I	I				
	町役場の情報公開	—	—	I	I	II	II
	懇談会や会議等への住民参加の機会	III	III				
	職員活動や議会の内容	—	—				
	ボランティア・NPO 活動などの推進			II	II		
	行事やイベント等の交流の場の充実	IV	IV				
	町職員の対応の態度や仕事ぶり						
	町役場の行財政改革や経費節減策	—	—	IV	IV	I	I
地域づくりに関すること	町民主役の協同のまちづくり						
	各地区の特色と魅力ある地域づくり（地域自治組織活動）						
	若者定住対策による活気あるまちづくり						
	地域を支える人づくり	I	I				
	交流活動を通じての元気な地域づくり	I	I				

する)により調査している。

表-1は、文献3)に示された、グループごとの満足度と重要度の平均値を利用したものである。各グループの各カテゴリーの平均値より高いものに網掛け(表中の「満」は満足度、「重」は重要度)し、その網掛けのパターンから、タイプI:平均値よりも、満足度、重要度ともに高いもの、タイプII:平均値よりも、満足度が高く、重要度が低いもの、タイプIII:平均値よりも、満足度、重要度ともに低いもの、タイプIV:平均値よりも、満足度が低く、重要度が高いものを判別し、あるグループが他の2つと異なる場合に、I~IVを表中に記載した。グループによって満足

度と重要度のパターンが異なっている指標が多い。特に中高生に他のグループとの違いが目立つ。同じ指標でI~IVがグループごとに異なる(一、一も含む)場合は3つあり(表中に網掛けで示した)、「インターネットなどの利便性」、「町役場の情報公開」、「町役場の行財政改革や経費節減策」では、各グループのニーズ(重要度や満足度を置き換えて考える)の違いが大きいことがわかる。現実には各グループの中でも独自の意見をもっている主体が存在すると考えられ、「多様な主体」のニーズの多様さを示している。

### III. キャッチフレーズ指標セットづくり

既往の町づくり・地域づくり指標の多くは、客観的な評価指標のセットにとどまっていると筆者らは考え、主観的な評価指標を拾い上げることを考えた<sup>2)</sup>。大学生を対象に、「どのような町に住みたいか」というブレインストーミングを行い、指標を拾い上げる<sup>2)</sup>ことを繰り返した。しかし、それらをリストにすると「地域の機能(場)に関する指標」と、「その地域で果たせるライフスタイル(人の過ごし方)に関する指標」という性格の違う指標が混在しセットにまとめにくかった<sup>2)</sup>。「どのようなキャッチフレーズを掲げている町に住みたいか」という視点での指標セット作成(表-2)により、その問題は解決できた<sup>2)</sup>。なお、ブレインストーミング結果では、男女差、個人差が表れず、若者がもつニーズはある程度似通っていることが推察された(ブレインストーミングをさまざまな集団に対し行うことが今後の課題である)。

表-2の指標のうち、⑨までは既往の指標セットによく含まれるが、⑩以降は、本研究において、ブレインストーミングでの少数意見をくみ取り、セットに含めたものである。⑪⑫⑬は町の機能としては表しにくく、また各被験者にとって金銭的価値も異なると思われる指標である。その中で、⑩は町に機能があることも重要だが、機能以外にも、施策、そのコミュニティが共通して大事に考えているか、などが加味されて成り立つと思われるもので、複合的な性格をもつ。少子高齢化が懸念される現在、⑩は重要なものだと考えセットに取り入れている。

表-2の指標の個々を被験者が重視する度合いを5件法で尋ねるアンケート票を作成し、Google フォームを用いたWeb法により、2014年12月に若者(64人、全員20代前半)と2015年5月に仙台市に本拠地をおくNPO法人e-tec(環境生態工学研究所)会

員(24人、30歳代が1人、残りは全員40歳代以上)に対して調査を行い最尤法で分析した(IBM SPSS Ver.25)。因子固有値のスクリープロットから、若者は1因子構造、e-tec会員は2因子構造であることが示された。因子負荷量が0.5以上で、かつ上位5位以内のものを順に示すと、若者の結果では④⑦⑥③①であり、e-tec会員の第1因子は⑤②④⑩③、第2因子は⑬⑫⑨であった。これらより若者の結果は、「町の利便性」の1因子構造、e-tec会員の結果は、第1因子が「町の機能」、第2因子が「町の個性」の2因子構造と考える。異なる被験者集団のニーズの違いを因子構造と因子負荷量で表すことができる可能性が、試行段階の解析ではあるが、示された。

### IV. 多様な主体が住み続けられる農村にむかう現実の事例

2015年に宮城大学地域連携センターが区長やPTA役員を対象に「丸森町住民が活かしていきたい丸森町の要素」を聞き取り調査した結果<sup>4)</sup>と、2015年に筆者らが実施した、丸森町住民の丸森町に対する愛着構成要素を解析した結果<sup>5)</sup>によれば、「人と人の交流」、「自然環境」、「歴史・文化」、「町の名産品」、「町が主催するイベント」、「観光資源」など6つの指標が重要であるとされている<sup>5)</sup>。これらのうち、「町の名産品」を「町を代表するシンボル」も兼ねているとして捉えなおすと、6つの指標をあわせた取組みとして、丸森町大内地区で実施されている冬期湛水水田(冬水たんぼ)<sup>6)・7)</sup>が挙げられる。かつて飛来していたといわれるタンチョウの復帰を合言葉とした活動であり、観光化や地域創生につながりうる潜在力がある。また環境保全型農業の一形態である冬水田んぼを通じたブランド米の開発にもつながっていく。冬期湛水水田は、タンチョウ復帰を考える会による2015年度の41aのテスト試行から、2018年度の1,934aまで拡大した<sup>7)</sup>。ホテル

表-2 町が掲げるキャッチフレーズの形で町の個性を表す指標セットの案

①	環境負荷を出さないまち(大気や水を汚さない、廃棄物が少ない、など)
②	資源に恵まれたまち(水資源、食品、エネルギーなどが豊富、など)
③	快適な環境とふれあえるまち(自然が豊かで、まちが静かで美しい、など)
④	安全なまち(犯罪が少なく、自然災害などにも強い、など)
⑤	人と人のつながりがあるまち(祭りなどのイベントがある、近所付き合いが良好、など)
⑥	経済的な豊かさを感じるまち(雇用がある、活気がある、など)
⑦	生活の利便性の高いまち(公共交通機関が発達している、商業施設などがある、など)
⑧	趣味を実現するのに便利なまち(さまざまな施設が充実している、など)
⑨	福祉の充実したまち(公的支援、医療、教育が充実している、など)
⑩	家族の世話がしやすいまち(子育て、高齢者の世話がしやすい、など)
⑪	誇れるシンボルがあるまち(偉人を輩出している、希少生物種がいる、など)
⑫	名物食品があるまち(特産物、名物料理がある、など)
⑬	自分とのつながりを意識できるまち(自分が生まれ育ったまち、そうではないがまちの歴史を感じさせる、など)

の増加、白鳥・サギ・カモ・カワウ・カモメ等の多種出現などの変化が見られ、冬期湛水水田の生態系維持効果ではないかと考えられている。なお、2019年度はさらなる拡大が見込まれていたが台風19号による甚大な被害を受けて中止され、水路等が仮復旧状態であることから2020年度実施の見通しはたっていない。しかし、こうした現実の「多様な主体が住み続けられる農村」の振興に関連する活動は、試行として作成した「町のキャッチフレーズ指標」や関連する指標として示したものを実現化するともいえ、指標セットは「多様な主体が住み続ける農村振興のためのニーズをくみ取る」手段として有効である可能性を示唆する。

## V. ヒアリングと今後の課題

2019年11月の台風19、20号によって丸森町は甚大な被害を受けた。そこで、丸森町にさまざまな立場で関与する人々へのヒアリングを行い、丸森町民の高い愛着度が示されてきた「自然環境」についての今日の町での感覚を調査した。2013年の丸森町による調査から本報執筆までの間に起こった大きな災害が影響を与えたかどうかを知るためである。

得られた回答は、「自然の脅威に対する感覚の変化」、「防災に対する意識の変化」、「自然環境と共生する手段に対する意識の変化」の3つに分類できた。2番目の変化は、「自然に対する感覚は変わらないが、自助の必要性など、防災に対する意識が変わった」と言い換えることができる。また3番目の変化は、「自然環境にめぐまれた丸森町における甚大な被害の経験から、自然災害に対する個人の意識、地域コミュニティの結束、町づくりのあり方、他地域との協力など、人間側、社会側が変わっていくべきという意識の変化があった」と言い換えることができる。温暖化との関係や避難行動の見直しなど、最も多くの意見が集まったものでもあった。最後になるが、1番目の変化が、本研究において、2013年の調査以降の、現実の被害による自然環境に対する意識の変化として捉えておくべきものと最も関連が深い。具体的な回答を紹介すると「丸森町のキャッチフレーズである『水と緑のかがやくまち』が災害によって脅威に感じるようになった。水はきれいで川にも近寄っていたが、台風以降は水かさが増し土砂が堆積しているため少し恐怖を覚えた」、「これまで都市部にしか暮らしたことがなかったので、自然環境というと『非日常』や『行楽』のような楽しい面との紐づけがされていた。今回丸森町で被災を経験して、自然に近い所で暮らすということは恩恵を受ける部分と同時に厳しい側面があるというこ

とを知った。そういうことも受け入れた上で暮らしていこうと、少し夢見がちだったところから地に足がついた気持ちである」など、愛着の対象として解析してきた自然環境から、脅威を与える対象としての自然環境への変化を表すものが見られた。このような回答を踏まえて、今後、町のキャッチフレーズ指標セットをさらに改変していく必要がある。

**謝辞** 丸森町へのヒアリングは丸森町における現地協力者を通じて行ったものである。地域おこし協力隊とその関係者からは、町外から移住して活動している客観的視点を活かした回答を頂いた。地域おこし協力隊とその関係者との連携は、タンチョウ復帰を考える会(代表 梅津正喜氏)により推進された。ここに現地協力者に対して心より謝意を示す。本報には清水美和さん(元宮城大学)による基礎的検討の一部が反映されている。本研究は宮城大学研究費によって行われた。

## 引用文献

- 1) 内藤正明, 西岡秀三: 環境指標—その考え方と作成方法—, 国立公害研究所研究報告 74 (1984)
  - 2) 原田茂樹, 清水美和, 大野菜穂子: 眞・善・美の価値観によるまちづくり指標作成の試み, 環境科学会 2015 年会 (2015)
  - 3) 宮城県丸森町: 平成 25 年度第五次丸森町総合計画策定に係る基礎調査報告書 (2014)
  - 4) 宮城大学地域連携センター: 振興事業部報告書 (2015)
  - 5) 原田茂樹, 村上道夫: 森林・水系・農地にめぐまれた宮城県丸森町における町への愛着に関する考察, 用水と廃水 60(5), pp.56~63 (2018)
  - 6) 原田茂樹, 大野菜穂子: 宮城県丸森町におけるタンチョウ復帰と環境保全型農業のための冬期湛水水田の実現可能性, 用水と廃水 59(12), pp.54~63 (2017)
  - 7) 原田茂樹, 渡邊陽子: 宮城県丸森町における冬期湛水水田(冬水田んぼ)構築のための蒸発散を考慮した渓流水の流量モデル化, 用水と廃水 61(3), pp.197~208 (2019)
- [2020.6.22.受理]

### 原田 茂樹 (正会員)



**略 歴**  
 1963年 広島県に生まれる  
 1991年 東京大学大学院工学研究科博士後期課程修了  
 国立環境研究所  
 2014年 宮城大学食産業学部教授  
 2020年 福島大学食農学類教授  
 現在に至る

### 木村 薫子



1994年 宮城県に生まれる  
 2019年 東北大学大学院環境科学研究科修士課程修了  
 2020年 (株)日立製作所  
 現在に至る